教育文化会館 平和・人権学習「子どもと『ホームレス』の人がどう出会うか」

研 座 演 シ 資 映 他 体 ワ

川崎市教育委員会
川崎市教育委員会生涯学習推進課
TEL 044-200-3304

実施年月日 実績等	実施年月日：平成17年1月13日（木）～3月8日（火）（全8回） 参 加 人 数：29人（公開講座を含めると246人）
主催（共催）	川崎市教育委員会
開 催 場 所	教育文化会館、緊急一時宿泊施設「愛生寮」
対　　象	関心のある方
人 権 課 題	子ども、野宿生活者

事業の目的

川崎市でも小中学生や高校生による野宿生活者への襲撃事件が発生している。その背景には社会全体が不条理となっており、親や子どもが自尊感情を抱きにくいこと、また異質な他者との矛盾や葛藤を暴力で解決しようとする傾向が指摘される。そうした状況を踏まえ、寛容と非暴力により共生することを子どもたちに伝えられる地域社会づくりを考えるために実施した。

事業概要

全8回の講座は、講演やワークショップ、実地体験をはじめ多角的な要素で構成した。

第1回・2回

導入として、野宿生活者の現状と子どもとの交流の事例を、映像（ドキュメンタリー映画『あしがらさん』）、および講演（ルポライター・北村年子さん）を通じて学んだ。

第3回・4回

野宿生活者の襲撃の背景には、子どもたちが学校や家庭で疎外されていること、さらに野宿生活者を排除しようとする地域社会の現状があることを、映像や講演、ワークショップを通じて学んだ。

第5回・6回

非暴力・共生アクティビティを体験した後、子どもたちと野宿生活者が出会い、相互理解を深める場をどう作るかをワークショップで企画した。

第7回・8回

まとめとして野宿生活者緊急一時宿泊施設を訪問し、「これから自分たちに何ができるか」を考えた。

＜希望者のみ＞

NPO法人が行う野宿生活者の見回りに参加した。

連携状況

問題の性質上、野宿生活者に関わる他機関との連携の必要性を意識し、市長部局の福祉担当部署や人権担当部署、社会福祉法人、NPO法人、町内会、学校などの幅広い協力を得た。

北村年子さんの講演

みんなでまとめた意見を発表

特色・工夫した点

○全8回の講座を起承転結の4つに整理し、参加者が徐々に学習を深められるように工夫した。

○特に第1回と第3回の講座は、子どもたちと野宿生活者の参加を促した。その結果、約60人の高校生と約20人の野宿生活者の交流を図ることができた。

○特に第6回と第8回の講座は、「知って終わり」ではなく、参加者の一人ひとりが、子どもたちが参加しやすいプログラムの企画を練り、講座の終了後にはそれぞれの家庭や地域で実践に移せるようにすることに主眼を置いた。講座では、「ビデオ活用チーム」「まち歩きチーム」に分かれ、それぞれの企画案をまとめることができた。

○学校教育と社会教育との連携の必要性を意識し、地域の高校生が授業の一環として参加できるようにした。

○当事者の参加に加え、映像や講演、アクティビティ、参加型ワークショップをはじめ、多様な手法を取り入れた。

実施結果

参加者の反応・事業の反響等

○参加者の主な感想には、以下の7点が挙げられる。

1.同じ人間として見よう（存在を気にしよう、どうしてこんなに生活が違うのか疑問を持とう）。

2.事情を考えよう（孤独と飲酒の悪循環）。

3.解決策を考えよう（一人ひとりのニーズに合わせることが必要）

4.出会う機会を持とう（機嫌が悪い人や飲酒をしている人もいるが、基本的には、どこにでもいる普通の人と変わらない）。

5.ホーム（居場所）・レスという見方から、自分と野宿生活者との共通点が見えてくる。

6.（定住所なし→定職なし）の悪循環を知ることが大切。

7.「襲撃する心理に自らを重ね合わせる」→「人と関わり、受け止めることを考える」→「自尊感情の問題に気付く」という内省的な思考を通じ、「襲撃される側」「襲撃する側」を一つの問題として捉える視点を身に付けることが大切である。

○参加者の一部は、講座終了後もパトロールやバザーなどの野宿生活者への支援活動に参加している。

○事業は新聞（「神奈川新聞・平成17年1月13日付」「東京新聞・平成17年・1月28日付」）、テレビ（「ニッポン放送『うえやなぎまさひこのサプライズ！』・平成17年2月8日放送」）などでも取り上げられた。

反省点・今後の課題

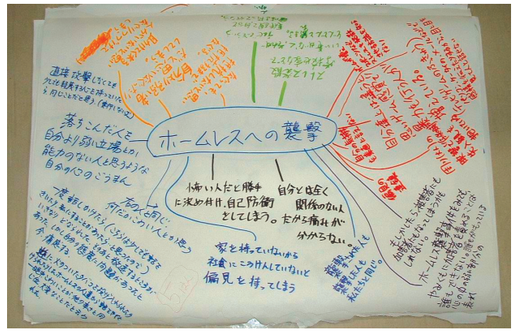
○参加者間のネットワークづくりがうまくいかなかった。

○第4回までの「インプットする段階」の参加者は多かったが、第5回からの「アウトプットする段階」では激減した。「見るだけ・聞くだけ」の講座は気軽に参加するが、それをもとに自ら企画を練り、行動に移すことは難しかったと考えられる。また、後半には、子どもや野宿生活者といった当事者が参加できず、現実性が失われたことも、参加者の減少につながったと推測できる。

○平日の昼間に開催したため、参加のできない人も多かった。

○今のところ、子どもと野宿生活者をテーマにした講座を継続的に開催する枠組みがない。

○小中学生を対象とした講座の開催も今後の課題となっている。



子どもたちが「ホームレスへの襲撃」についてまとめた意見